

第13課「ほかはすべて注釈」

安息日午後「今週のテーマ」

ローマ書の後半でパウロはユダヤ人の救いを述べた後、信仰によって義とされた人の生き方について語っています。今週はそのクライマックス。パウロが焦点を合わせていることは、食べ物のことでも特定の日のことでもありません。それは、互いに受け入れ合い、神と調和する教会を形成し、この世に証しすることです。これこそ信仰による義の目標としていることです。16章にはたくさん名前が書かれていますが、パウロが求めている愛の共同体(教会)がそこに示されているのです。

日曜日「信仰の弱い兄弟」

教会には考え方の違う人がいます。菜食をどこまで徹底するか、安息日の守り方をどこまで厳しくするかなど行動の規準の捉え方は人によって違います。この相違に関してのパウロの立場をわたしたちの原則として受け入れ学ばなければなりません。

質問1 なぜパウロは規準に厳格な人たちを「弱い人」とよび、あまり厳格でない人たちを「強い人」と呼んだのでしょうか。

答え ①厳しい人たちはそうでない人たちを裁いてしまうという弱さがあるのです。

②当時、「弱い」という言葉が几帳面な人を表す言葉として用いられていたから。

質問2 相違する人たちへのパウロの考え方とはどのようなものですか。

答え ①ローマ14:3と15:7で互いに批判や軽蔑をせずに「受け入れあう」こと

②ローマ14:19と15:2で互いの向上を求める努力をすること

③ローマ14:5と14:22で各自が自分の確信にしたがって行動すること

道徳、倫理関係の問題以外の点においてこの原則に従い、平和と喜びを持って生活することの重要性をパウロはわたしたちに訴えています。

月曜日「自分の量る秤で」

問3の私見： 自分に甘く人に厳しい人が多いです。「人のふり見て我がふり直せ」です。裁くのではなく自己反省に結びつける態度が求められています。

問4の私見： 各人は神との関係の中で罪とされ、裁かれるのであって、決して人の考えや標準、常識によってではありません。ゆえに他の人を裁いたり、侮ったりすること自体、神の前に自分が裁かれてしまうこととなります。

問5の私見： 話のテーマは「互いに裁き合わない」でありますから、その中で個人の良心が神との関係の中で判断していることを他の人が裁くことがあってはならないことをパウロは強調しています。

火曜日「人を誘惑しない」

どのような生き方をするかは個人と神との関係です。しかし、自分の生き方は、ほかの人に影響を与えることも事実です。ゆえに、互いに平和と向上を求めることも大切です。

水曜日「特別な日を守る」

パウロが「それ自体で汚れているものは何もない」と語ったとき、それは何を食べても良いといったのではないように、「ある日を他の日より尊ぶ人」とは安息日を重んじる人のことを言及していません。

木曜日「祝福の祈り」

パウロは神を忍耐と慰めの神と呼び、その神により考え方や立場の相違を乗り越えたキリストにある一致と平和を信仰による従順によって与えられ、ともに義とされたものの新しい生き方をもって神を讃美することこそ、パウロの祈りでありこの手紙で伝えたかった部分なのです。